

免疫吸着療法は Balo 病の Th1/Th2 バランスを改善し治療効果を有する

埼玉医科大学神経内科：野村恭一、大島裕紀、三井隆男、木下俊介、島津邦男

【目的】

Balo 病に免疫吸着療法 (IAPP) を施行し、神経症候の改善を認めたので報告する。また、経時的にリンパ球サブセット、ケモカインレセプターの解析を行った。

【症例】

52 歳の男性。2002 年 5 月 4 日急に無口、5 日には異常行動を認め入院。頭部 CT、髄液に異常なく、6 日に軽度の意識障害、7 日に左片麻痺、感覚性失語症を認め、MRI 拡散協調画像で右後頭葉、左側頭葉白質に大きな高信号域を認め、脳梗塞として治療を開始。10 日から意識障害は改善。19 日急激に意識障害が進行、左完全片麻痺、20 日 MRI で右前頭葉、側頭葉、後頭葉白質に新たな病変を認め Balo 病と診断。21 日からパルス療法を開始するも神経症候の改善を認めずステロイド治療抵抗性であった。6 月 5 日末梢血リンパ球サブセット検討では、活性化 CD4、CD8 細胞、Help-ind 細胞の上昇、CD4 細胞の CCR5/CCR3 比 (Th1/Th2) は 3.85 (正常<1.8) と免疫状態の異常を示した。6 月 7 日から IAPP を 3 日間施行、片麻痺、高次大脳機能は著明に改善、Th1/Th2 比も 1.32 と正常化した。その後、7 月、8 月、11 月に IAPP を施行、活性化 CD4、CD8 細胞、help-ind 細胞は正常化し、後遺症を残さず社会復帰した。

【結論】

IAPP は、Balo 病の免疫状態を改善し、神経症候の進行を抑制、改善する有効な治療法である可能性を示した。

免疫性神経疾患に対するサイタフェレシスの臨床応用

国立療養所川棚病院 神経内科・臨床研究部 松尾秀徳, 神原千晶, 後藤公文, 福留隆泰, 澁谷統壽
旭メディカル(株)大分開発研究所・小野寺博和, 吉田 一

【目的】

免疫性神経疾患におけるサイタフェレシスはリンパ球除去療法を中心に行われてきた。しかし、選択的に病因となる免疫担当細胞を除去することが可能であれば、より効率的・効果的な治療が可能となる。われわれは、多発性硬化症などの T 細胞介在性の免疫性神経疾患で、病因となる CD4 陽性 T 細胞を *ex vivo* で除去し免疫療法を行う目的で体外循環治療システムを開発してきた。

【方法】

臨床試用を想定した治療器（目標血液灌流量を 3L、CD4 陽性 T 細胞除去カラム）を作成し、ヒト新鮮血（混合血）を用いて灌流実験を行い、安全性と性能評価を実施した。さらに、健常人を対象にした体外循環試験を施行し、その性能および生体反応を評価した。

【結果】ヒト新鮮血液を用いた臨床スケールカラムの評価では、十分な CD4 陽性 T 細胞除去能が示され、臨床で十分な機能を発揮できる可能性を確認できた。健常人を対象とした体外循環試験では、全血 3L の体外循環処理が施行できた。カラムの直後では CD4 陽性 T 細胞はほとんど吸着され、体循環中では軽度の白血球減少とともに CD4 陽性 T 細胞の減少が認められた。

【結論】

体外循環による CD4 陽性 T 細胞除去の臨床応用の可能性が示された。